

## 2022.9.25 主日礼拝

### 聖霊降臨節第17主日礼拝（家庭礼拝の式順）

黙 禱

聖 書 ペトロの手紙Ⅰ4章7-11節

説 教 「覆いなる愛」 牧師 三浦 啓

讃美歌 487「イエス、イエス」

献 金

黙 禱

「万物の終わりが迫っています」とペトロは語ります。2千年前のキリスト者には相当リアルなことだったのでしょうが、現代人である私たちには、どうもピンと来ないところがあります。しかし、今、自分が生きている、置かれている日常生活が終わる時、失う時が来ると考えれば、私たちも想像ができますし、何が求められているのかも何となく見えて来るでしょう。

今、個人的に時間を見つけて旧約聖書を少しずつ読み進めており、まだ読み始めたところなので創世記を読んでいます。先日、ヤコブがシケムという町で大失敗をし、その時神様の語りかける言葉を聞き、ベテルの町に移り、そこに祭壇を築いて神様を礼拝するという35章を読み進めました。自分のことを憎み、殺意さえいだいていた兄エサウと和解し、シケムの町に落ち着いて交易がうまく行き始めたヤコブは、慢心していたように思われます。神様の言葉を聴かず、自分の考えで生活を押し進めていたヤコブは、それが元になって大きな失敗をし、それまでの日常生活を失うのです。

人は、失敗や挫折、苦難に遭って、日常性を失った時、それまで聞こえなかった神様の言葉にハッと気づくことがあります。しかし、できることなら普段から、謙虚な信仰を持って神様の言葉に耳を傾けることが大切であると思います。この生活にも終わりが来るかも知れない、その意識を持って、神様の言葉に耳を傾けるのです。その姿勢が、7節にある「思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい」ということでしょう。

イエス様が弟子たちに、目を覚まして祈りなさい、と言われたことを連想しました。それはつまり、神様の言葉に目を覚ましていなさい、謙虚に聴きなさい、という教えだと思います。今日の聖書の御言葉で言えば、「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい」との神様の言葉を聴くことではないでしょうか。

愛し合うという教えは、今日の聖書箇所でも、様々な言葉に言い換えられています。「その賜物を生かして互いに仕えなさい」という10節の言葉もそうです。

以前、共愛学園高校の授業で10節に書かれている「賜物」について考える授業を行ったことがあります。自分にはどのような得意な事があるのかを紙に書いてもらい、それを家族や友だち、クラスの中でどのように用いていくのかを考えてもらいました。その時に、コリントの信徒への手紙Ⅰ12章12節以下に記された「一つの体、一つの部分」を併せて読みました。パウロは、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人ひとりはその部分です」と語っています。しかし、信徒たちは自分の賜物を比べ合い、奉仕に優劣を付けていました。そのようなことをしていたら、キリストの体である教会を作り上げることはできません。一人ひとりがキリストの体の部分として奉仕をする時、大切なことは何か？それは「愛」だ、とパウロは教えます。それこそが最高の賜物なのです。そしてコリントの信徒への手紙Ⅰ13章でパウロは、愛について語り、14章で「愛を追い求めなさい」と勧めるのです。

今日の聖書箇所、ペトロの手紙Ⅰ4章10節で、「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を生かして互いに仕え合いなさい」と記されています。自分の賜物は何か。それを考え、提供し、比べるのではなく、生かして、互いに仕え合う。そこにキリストの体である教会を作り上げることが可能になります。そのように互いに仕え合う上で、最も大切なこと、要となるものは何か。それは「愛」です。信仰における「愛」です。

「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい」とペトロは勧めます。その後が続く、「不平を言わずにもてなし合いなさい」ということも、「その賜物を生かして仕え合いなさい」ということも、最初の「心を込めて愛し合いなさい」という教えの焼き直しだと言えます。愛し合うということを実体的に言い換えたのです。なので、今日の聖書箇所でペトロが語ろうとしている内容の中心は何かと言えば、「愛し合うということ」だと言って良いでしょう。

何よりもまず、心を込めて愛し合うこと。なぜなら、「愛は多くの罪を覆うからです」とパウロは語ります。おもしろい表現だなあ、と感じます。と言うのは、私たちは、罪を“赦す”と言ったり聞いたりしますが、罪を“覆う”とは通常、言わないからです。想像をかき立てられる、ユニークな表現です。

「多くの罪を覆う」。ともすれば、それは悪事を“覆い隠す”、というイメージになるかも知れません。悪事と罪を覆い隠し、人から見えないようにし、その責任を逃れようとする行為です。隠蔽工作というやつです。

もし覆い隠すものが、自分の罪であるならば、それはまさに罪の隠蔽工作でしょう。しかし、それが相手の罪であるならばどうでしょう。しかも、自分に損害や迷惑を与える相手の罪だとしたら？……もしそうだとしたら、覆うということは、隠すというよりも、“かくまう”とか“かばう”というニュアンスになります。相手をスッポリと包み込み、“守る”というニュアンスになります。私は、覆うというのはそっちだと思うのです。

もう一つ、「覆う」という言葉は、英語ではカバーと言います。英訳の聖書でも、8節にはカバーという言葉が使われています。それで、ふと思い浮かべたのが、スポーツです。

例えば、サッカーで相手チームが攻撃し、自分のチームが守っている時、もし自分が相手選手に抜かれたとしたら、強いチームであれば、チームメイトがすぐに抜かれた所へ来て守ってくれます。逆にチームメイトが抜かれれば、自分が走って行って守らなければなりません。そのように、チームメイトに助けってもらったり、チームメイトを助けることを“カバー”と言います。もし信仰をチーム競技にたとえたとしたら、私たちがミスをした時に、それをカバーしてくれる人がイエス様でしょう。

この手紙を書いたペトロは、自分のミスをイエス様にカバーしていただいたと強く感じていたに違いありません。どの福音書にも記されていますが、ペトロは、何があってもイエス様のことを知らないなどとは決して言わない、死んでも言わないと豪語していました。しかし、イエス様が捕らえられ、裁かれ、十字架につけられることになった時、ペトロは、弟子である自分も同じ目に遭わされることを恐れて、「イエスなど知らない」と3度もその関係を否定してしまいました。ずっと従って来た、愛して下さったイエス様を見捨ててしまったのです。決定的なミス、大きな罪です。しかし、イエス様は、このことを予想しておられました。ペトロのミスが起きる前から祈っておられました。赦していました。そして、復活してペトロに現れ、信頼して、再び宣教の使命を託してくださいました。ペトロは、自分の決定的なミスをイエス様にカバーされたと深く感じたに違いありません。自分の大きな罪を、多くの罪を、イエス様に覆っていただいた、スッポリと包んでかくまっていたいただいた、かばっていたいただいたと感謝したに違いありません。そして、ペトロと同じように、私たちも自分の罪を、ミスをイエス様にカバーされ、覆っていただいていると信じるのが、信仰の世界です。

ところで、イエス様はペトロを、私たちを、だれからかくまい、だれに対して

かばったのでしょうか。それは、父なる神様に対して、です。7節に「万物の終わりが迫っています」とありました。それは言い換えれば、神様の裁きの時が迫っているということです。しかし、罪のために裁かれるはずの私たち一人ひとりを、イエス様が、父なる神に対してかばってくださる、その裁きからかくまってくださる。十字架の上でご自分の命を犠牲にして、その愛で私たちに覆ってくださる。そのように信じるのが、キリスト教信仰です。別の言い方をすれば、私たちの人生は、その多くの罪とミス、人の愛と神様の愛によって覆われながら生きていく、生かされているという真理を、聖書は示しているのです。

そのように、イエス様によって愛されているのだから、あなたがたも神様の前に立つ者同士、「何よりもまず、心を込めて互いに愛し合いなさい」とペトロは言うのです。愛によって多くの罪を覆いなさいと勧めるのです。

以前、敬和学園高校に勤めていた時に、卒業式である生徒が生徒を代表して式辞を述べました。その生徒は、中学時代、ひどいじめに遭って不登校になりました。やっとの思いで敬和学園に入学し、でも当初は、自分をいじめた相手を恨み、絶対に赦せないと考えていたそうです。しかし、敬和学園で高校生活を送るうちに、自分が先生方から、周りの友だちから、深く愛されていることを感じるようになったそうです。そして、そのような人の愛を通して、神様に愛されているという聖書の教えも分かるようになったといいます。その愛によって自分を受け入れられるようになった。改めて振り返ってみると、もしあの時いじめられていなかったら、自分は敬和学園に入学しなかつたらあつたら。そして、人に愛されている喜びも、神様に愛されているすばらしさも知ることはなかつたらあつたら。だから、これから先、あの時、自分をいじめた同級生に会う機会があつたら、こう言いたい。“ありがとう”と。そう言って、この生徒は卒業して行きました。

自分の辛い経験をそのように前向きにとらえるのはなかなかできることではありません。この生徒の成長を改めて感じながら、「愛は多くの罪を覆う」というのはこういうことではないかと思いました。自分が人から、神様から深く愛されている恵みを知って感動する。だからこそ、自分も人を愛する。自分に対して嫌なことをした相手でも愛そうとする。その心が、お互いの多くの罪を覆い合って、この世を愛と平和な世界にしていくのだと思います。

万物の終わりの時まで、命ある限り、生かされてある限り、私たちは、多くの罪を覆い合い、互いに愛し合うイエス・キリストの道を歩いて行きたいと願います。  
(牧師 三浦 啓)